連載 英語論文の書き方 —誰も教えてくれなかったコツ—

第1回 視座と主語とパラグラフ

小山哲男^{*1-3} Tetsuo Koyama

はじめに

この号から3回連載で、筆者が考えるところの「英語論文の書き方」を紹介します。筆者の趣味の1つは言語や芸術に関する読書です。医学とは直接関連しない分野ですが、読み進むうち英語で医学論文を書くヒントが多く含まれていることに気がつきました。世に英語論文の書き方を指南する本がたくさん出ています。それらのほとんどは英語の堪能な先生による執筆で、多くのページを語法や構文の解説にあてています。翻って筆者は、それらの知識に乏しく、英語が得意ではありません。それでも約四半世紀にわたって年1編以上のペースで主著英語論文を公表し続けています。それは日本語と英語の違いと共通点、論理構成、そして表現の手法について、**きわめて単純なコツ**に気がついているからです。今号から3回連載でそれらを述べます。本連載は言語学や芸術学の厳密な知見を反映するものでなく、筆者が一般向け書籍から汲み上げた実践知を紹介するものです。初回は日本語と英語の違いと共通点について述べます。

日本語の視座、英語の視座

本誌読者のほとんどが日本語を母国語としています。そのため、英語論文を書くとなると日本語と英語のギャップに悩まされます。日本語と英語の大きな違いの1つは**文章の視座**です。ここで川端康成の「雪国」の冒頭をみてみましょう。日本語の原文(図1)と英訳(図2)を示します。原文と英訳を読むと、それぞれ異なった情景が脳裏に浮かびます¹⁾。日本語の原文では文章に合わせて視座が動きます。自らカメラを持って外の景色を写しているようです(図1)。これに対し英訳の視座は、情景全体を俯瞰して外からカメラで写しているようです(図2)。このように日本語と英語では文章の視座が大きく異なります^{1, 2)}。

この違いは、日本語と英語の大きな違いである**主語の問題**に行き当たります(表1)^{1, 2)}。例えば、“I have a son.”や“I found the house empty.”の文を「私は…」と訳するときこちない日本語になります。翻って「富士山が見える」を“Mt. Fuji is visible.”と訳するのは不自然です。このように日本語と英語では別の視座からの構文が必要となることが少なくありません。海外の旅先で現在地がわからず「ここは何处？」と尋ねようと“Where is here?”と発しましたが通じませんでした。そこで“Where am I?”といい直し、ようやく通じた経験があります。英語は自分自身さえ外から俯瞰する視座であることに気がついた瞬間です。

*1 日本リハビリテーション医学会 編集委員会／国際誌編集委員会

*2 兵庫医科大学リハビリテーション医学

*3 西宮協立脳神経外科病院リハビリテーション科
【連絡先】〒663-8211 兵庫県西宮市今津山中町11-1 西宮協立脳神経外科病院リハビリテーション科 小山哲男
E-mail : koyama.t@nk-hospital.or.jp
DOI : 10.2490/jjrmc.57.346

—国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

図1 日本語の視座を示す例（文献1より改変引用）

川端康成「雪国」の日本語原文、冒頭の文には動作の主体を示す主語が見当たらない。

—The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.

図2 英語の視座を示す例（文献1より改変引用）

英訳は Edward Seidensticker によるもの、日本語原文の冒頭の文にはない The train が主語になっている。

英語史からのヒント

学校英語で習ったように、現代英語には5つの基本文型があります。

- ・ S-V : Bob smiles.
 - ・ S-V-C : Eric is happy.
 - ・ S-V-O : Eric sees Carla.
 - ・ S-V-O-O : Bob gives Carla a flower.
 - ・ S-V-O-C : Carla finds Bob intelligent.
- (S : 主語, V : 動詞, O : 目的語, C : 補語)

ここで注目すべきは、5つの文型のいずれも筆頭に立つ主語がなければ構文が成り立たないことです。さらには、語と語の関係は語順で決定されていることです。このように、主語と語順が決定的に重要であることが現代英語を特徴づけています。しかし、これが昔から英語の特徴であったかという、実はそうではありません。そこで英語の歴史を振り返ってみましょう³⁾。

紀元前 4,000 年ぐらいに南ロシアのステップ地帯で、現在印欧語族と呼ばれる言語群の祖先が用いられていました。紀元前 1,500 年頃には、それが

表 1 英語と日本語の主語の違い (文献 1, 2 より改変引用)

English	日本語
I have a son.	息子がいる.
I found the house empty.	家は空っぽだった.
I see Mt. Fuji.	富士山が見える.
I need time.	時間がかかる.
I like this city.	この街が好きだ.
Where am I?	ここは何処?

分岐しはじめ、いくつかのグループに分かれていきました。それらのうち、現在の北欧やドイツ方面に展開したものがゲルマン祖語です。紀元前 500 年頃からゲルマン祖語はさらに分岐しはじめ、原初の英語、ドイツ語、オランダ語、北欧諸語の基礎を形づくっていきました。そのうち、ドイツ北部やデンマーク南部に居住していたアングロ人、サクソン人、ジュート人が原初の英語を母語としていました。後にアングロ・サクソン人と総称される民族です³⁾。

紀元 5 世紀ごろ現在の英国ブリテン島には、同じ印欧語であるケルト語派を話すブリトン人が住んでいました。伝説によると 449 年、アングロ・サクソン人はブリテン島を攻略し、その大部分を奪い取ったということです (図 3)。こうしてブリテン島の北部と西部を除く土地は、アングロ人が居住し支配する地 Englalund、転じて England (イングランド) と称される王国になりました。この頃の彼らの言葉は古英語と称され、スペリングも発音も文法も今の英語とは違います。古英語では、文中における語の役割は、語形 (主に語尾) の変化である「屈折」により示されます。現代英語よりもむしろ現代ドイツ語に近いタイプのものでした³⁾。

そして 1066 年、また大きな出来事が起こります (図 3)。バイキングの末裔で、フランスのノルマン地方のウィリアム 1 世がイングランドを征服したのです (ノルマン征服)。その結果、イングランドではフランス語が高い地位におかれ、英語は相対的

に低い地位となりました。このあと英語は大きな変化を遂げます。1 つ目は語彙です。支配者階級の話すフランス語から大量の語彙が入ってきました (peace, miracle, beauty など約 1 万語)。2 つ目は文法です。古英語でみられた「屈折」が次第に失われ、それに代わって語順が決まってきたこと、それに伴い主語が必須となったことです³⁾。

古英語では、名詞は 4 つの格 (主格、対格、属格、与格)、2 つの数 (単数、複数) と 3 つの性 (男性、女性、中性) により変化し、動詞は法 (直接法、接続法、命令法)、時制 (現在、過去)、主語の人称 (1・2・3 人称)、数 (単数、複数) に応じた「屈折」がありました。語と語の関係は、このような「屈折」で示されます。これら文法上の重要指標である「屈折」は主に語尾の変化で示されます。しかしながら、ゲルマン語派では原則的に語の第 1 音節にアクセントが置かれます。そのために時代を経るごとに語尾の語形変化は薄らいできました (屈折語尾の水平化)。ゲルマン語派のドイツ語、オランダ語、北欧諸語でも程度の差はあれ、歴史的に屈折語尾の水平化がみられます。しかし、ゲルマン語派の中、屈折語尾の水平化を早い時期に最も顕著に経験しているのが英語です。事実、現代英語では動詞に関して三単現の s にその痕跡を認めるに過ぎないほどです³⁾。

古英語では「屈折」が重要な文法標識を示していたため、語順はそれほど重要ではありませんでした。よく現れる語順の傾向があったにせよ、SVO、

図 3 プリテン島に住む人々の変遷と英語史

アングロ・サクソン人が到来するまでにプリテン島で使われていたケルト語派の末裔の言葉は現在、スコットランド、ウェールズ、コーンウォール地方などプリテン島辺縁に残っている。

SOV, OVS, OSV など、語順はかなり自由でした¹⁾。しかし、屈折が失われるにつれ、語と語の関係を示す指標は語順や前置詞にとって代わられました。こうして語順が固定化されていきました。古英語、中英語では非人称構文では主語の存在を前提としない構文が隆盛を極めていました。しかし、それらは近代英語で衰退しました。それは屈折の減退に続く語順の固定化の圧力のもとでした³⁾。かくして、必ずしも主語を必要とせず、語順も自由であった昔の英語は、歴史的変遷の中、主語が必須で語順が重要である現在の姿になってきたのです。

日本語史からのヒント

ここで立ち止まって日本語を振り返ってみましょう。英語の例でみたように、言葉は時代とともに変わります。私たちの母語、日本語も約 120 年前、表記に大きな変化が起こっています。1つは段落、もう1つは句点です。英文学者の外山滋比古氏は、紫式部から井原西鶴まで日本文学の作品には段落がなく、今の版本にあるのは後でつけたものであると述べています^{4,5)}。国会図書館のデジタル資料で井原西鶴「好色一代男」の原典をみると、た

しかに段落がありません (図 4)。さらに、外山氏は、明治初期に欧米の言葉に接した日本人の驚いたことの1つがパラグラフだったことを述べています^{4,5)}。これを段落として最初に取り入れたのは明治 36(1903)年、文部省の国定教科書ということです。日本語の段落は欧文のパラグラフの影響とのことです。

さらに、「好色一代男」をよくみると、句点が振られていないことに気がつきます。江戸時代の出版は木版画の草書体で、文字のまとまりを離すことで文章の区切りを示すことができました。ところが明治中期になって出版に活字が用いられるようになると、このような区切りができません。その後、明治 39(1906)年に発表された句読法案により、句読点の置き方の標準がはじめて公的に示されました。明治の文豪の文体に句読点の運用の変化をみることができます (図 5)。明治 29(1896)年の樋口一葉「たけくらべ」の第1章は、延々と読点で文章が続いた後、ようやく1つの句点で終わります。翻って約10年後の明治 38(1905)年、夏目漱石は「我輩は猫である。名前はまだ無い。」と、文章を短く句点で区切っています。このように、今私たちが

図4 井原西鶴 好色一代男 (1684 年) (国立国会図書館 デジタルコレクション 永続的識別 info: ndljp/pid/1288213 より転載)

この作品は文字通り、ある好色男性の異性、それだけでなく同性との艶聞の一代記である。残念ながら筆者は読み下せない。

使っている日本語の表記は、20 世紀以降の比較的新しいもののようです。

パラグラフ・ライティング

英語も日本語もそれぞれの歴史を経て現代に至っています。先に述べたように日本語と英語には、視座と主語に大きな違いがあります。英語で発信するに際し、ここは強く意識すべきです。その反面、現代の日本語の表記は英語の影響を受けています。そのため両者に共通して扱えるところがあります。それはパラグラフを意識して書くことです⁶⁻⁸⁾。

典型的なパラグラフは、下記のように **Topic sentence** (主題の提示)、**Supporting sentences** (具体的内容)、**Concluding sentence** (まとめ) の組み合わせからなります。

- ・ Topic sentence (主題の提示)
- ・ Supporting sentences (具体的内容)
- ・ Concluding sentence (まとめ)

これら 3 つの要素のうち、Supporting sentences は欠かすことができません。しかし Topic sentence (主題の提示) と Supporting sentences (具体的内容) だけ、Supporting sentences (具体的内容) と Concluding sentence (まとめ) だけでパラグラフが構成されることがあります。最も大切なことは、**1 つのパラグラフに 1 つの思考、アイデアのみを含めるようにデザインすることです。**

先述の外山氏は、日本語の段落は欧文のパラグラフに由来すると指摘します。同時に氏は、段落とパラグラフは形こそ似ているが内容は異なると論じています^{4,5)}。1 つのパラグラフは 1 つの思考、アイデアで完結しています。そのために独立性が高いものです。論旨の流れに沿って、パラグラフの単位で順番を入れ替えることだって可能です (次回参照)。翻って段落はパラグラフのように 1 つひとつを切り離せる構造とはなっていません。段落は、1 つの思考という単位より、文章の長さの都合で整えられることが少なくありません。それゆえ一連の文章で、段落単位で入れ替えることは困難です。表記にパラグラフを用いると、日本語の

図5 明治29(1896)年発表の樋口一葉「たけくらべ」と明治38(1905)年発表の夏目漱石「我輩は猫である」の冒頭

aの樋口一葉「たけくらべ」の冒頭は1,800字以上が、80個以上の読点で連なったあと、ようやく1つの句点で終わる。長大な1文だけで1章が構成されている。bの夏目漱石「吾輩は猫である」の冒頭は句点で区切られた短い文章で綴られている。(青空文庫 <https://www.aozora.gr.jp> (2020年2月17日アクセス) より転載)

可能性がもっと広がるだろうと氏は指摘しています⁴⁾。筆者はその考えに共感し、日本語の文章もできるだけパラグラフを意識して書いています⁸⁾。

おわりに

「英語論文の書き方」と題して3回の連載をはじめました。本連載は既存書籍で詳述されている語法にはほとんど触れません。その代わり、既存書籍でほとんど触れられていない英語史、論理構成、表現の手法より、英語論文の書き方のヒントをお伝えします。「誰も教えてくれなかったコツ」との副題はそれゆえです。初回の本稿で視座、主語、そしてパラグラフについて考察しました。次号の第2回は論理構成について考えます。お楽しみに。

文献

- 1) 金谷武洋：英語にも主語はなかった—日本語文法から言語千年史へ。講談社、東京、2004
- 2) 時吉秀弥：英文法の鬼100則。明日香出版社、東京、2019
- 3) 堀田隆一：はじめての英語史—英語の「なぜ？」に答える。研究社、東京、2016
- 4) 外山滋比古：日本語の散歩道—パラグラフと段落。日本経済新聞、東京、2010年11月14日。
- 5) 外山滋比古：日本語の論理。中央公論新社、東京、1987
- 6) 小山哲男：なぜ臨床研究か 臨床研究の意義—あるリハビリテーション科医師の場合。リハビリテーション栄養2019；3：6-12
- 7) 小山哲男：1章 臨床研究の意義論3。リハビリテーション領域。臨床研究アウトプット術（前田圭介、室谷健太 編著）。中外医学社、東京、2020；pp 17-26
- 8) 若林秀隆：5章 論文を書く1。パラグラフライティング。臨床研究アウトプット術（前田圭介、室谷健太 編著）。中外医学社、東京、2020；pp 262-269